

《資料》

現代の少年をとりまく状況と問題

渡 辺 則 芳

* 本稿は昭和六三年九月九日におこなった本学鶴川校舎での公開講座の要旨である。内容は相当に極論的な意見述べているところもあるが、参加者との討論を期していたため問題提起として敢えてそうしたものである。当日の資料・文献は後掲の年表を除き割愛した。

目 次

第一章 はじめに

第二章 社会（地域社会）の変化

- ・ 近隣の頑固なお爺さん、お婆さん、おじさん、お婆さんの不存在
- ・ 他人の子供に注意をしない―個人主義、孤立主義
- ・ 青年団、町内会の機能

現代の少年をとりまく状況と問題（渡辺）

- ・友達をつくれない子供社会―塾での結びつき
- ・マスコミの影響―親しい人の不存在

第三章 学校（教育制度）の変質

- ・教員の質―優等生的教員の増加。体罰の問題
- ・管理型教育

- ・受験体制―偏差値中心―知育と競争原理 *スポーツにおいても同じ

第四章 家庭の変質

- ・親の権威―母親の位置づけの変化
- ・親の生き方と子供の疎外
- ・子供の数の減少（一人っ子の増加）
- ・住宅事情の変化（三世代同居の難しさ等）
- ・受験に対する対応―家庭の仕事を分担させない―生活実感なき成長期

第五章 まとめと今後の課題

- ・親としての対応
- ・問題解決のための方策

第一章 はじめに

戦後四〇年の少年非行の動向をみると、犯罪・非行に関する統計からみてもかなりはっきりした変化が認められる。終戦直後の混乱期における非行とその影響の線上にあった二〇年代、いわゆる朝鮮戦争を契機とした復興期の三

〇年代。この時期は浮浪児等の児童福祉問題・いわゆるヒロポン等薬物の問題・成人と同じく凶悪な年長少年の問題が特徴的であった。そして三〇年代の終わりぐらいから四〇年代にかけて高度経済成長期に入り消費文化を是とする時代風潮となる。一度崩壊したわが国は国際競走に負けない力をつけたのであるが、社会情勢はベトナム反戦運動を契機に大学紛争が発生し、学生運動が激化していくのである。しかし、他方では、シンナー・ボンド遊びが流行するなど、遊び型の非行が表面化してくる。

四〇年代後半までの高度経済発展も四八年のオイル・ショックで転換期をむかえる。それは経済成長の歪みを露呈していくことになる。モータリゼーションの流れの中で、遊び型の万引・売春、果ては暴走族の問題が表面化し激化していく。非行年令で言えば低年令化がはっきりしている。そして、五〇年代以降、登校拒否・暴走族・校内暴力・いじめ等学校教育現場における問題（体罰も含む）が多発してきている。わが国の犯罪非行問題の歴史の中で学校教育がその大きな原因になったことはなかった。教育問題が少年問題に直結してきているのが現在の極めて大きな特徴である。ところで、さらに不気味であるのは、汚いからといって浮浪者を殺傷するような非行事件が発生してきたことである。理由なき殺傷事件や自殺事件はこれまでの非行の特徴から質の異なった行動としてその背景・動機を良く分析しておかねばならない。

第二章 社会（地域社会）の変化

都市化の波の中で少年を取り巻く地域社会をみてみると次のような変化が認められる。

現代の少年をとりまく状況と問題（渡辺）

① かつては隣近所にいた口喧しい頑固なお爺さん・お婆さん・おじさん・おばさんといった人達がいなかった。人生の経験者・モラルの教科書のような存在がなくなっている。

② これらの人達を含め、大人たちが他人の子供にたいして口を出さない。例えば、夜遅く何の理由もなく道路や公園をたむろしている子供を見ても、注意をしない。あるいはいじめの現場に遭遇しても見てみぬふりをする、という大人が多くなっている。

③ 青年団や町内会という組織の存在意義の変質。従来地域社会のなかで住民の和のために機能していた自治会・町内会や青年団・子供会といった組織がある地域では殆ど名目だけになっていたり、単に地方行政の末端としてのみ存在するものになっていたり、極端なところでは、特定の人に独占された組織・あるいは特定の政治的な目標をもったものとして存在するにすぎないものに堕してしまい、本来あった住民相互の連帯を強める機能が喪失している。

④ 友達の不存在。子供の生活時間をみると、ウィーク・デーの殆どは学校で小学校の五、六年ともなれば全部ではないにしても学習塾がよいが始まる。それまでの近隣の子供の付き合い、すなわちギャングが歯が欠けるようになってくる。反面、学校中心の結びつき、付き合いが主になってくる。特に、私立学校が多くある都会地域は顕著である。なお、マスコミの影響も考えておかなければならない。他方では、ラジオの深夜番組でキャスターに人生相談などをしたり、命の電話に話しかけたりする子供が想像以上に多いことは、子供のまわりにいかにそういった人々が少ないかを物語るものであろう。

さらに、われわれ日本人は良くも悪くもテレビ・ラジオの影響下にある。良き情報なり、文化を吸収する面は別として、特に子供社会の中では殺人・傷害・猥褻な内容のテレビ・ラジオが直接ではないにしても、少なからず心理的に人間の価値や生きることの意味・命の尊さ・死の苦しみについてドライな感じ方をするような影響があるといわれる。

第三章 学校（教育制度）の変質

学校教育制度が少年の非行原因に大きく関わってきているが、我が国の歴史の中で近時ほど問題となったことは今までなかった。かつてなかったような諸問題が教育制度に起きている。以下いくつか指摘する。

① 教員の資質。かつて教員採用試験はこれほどの難関ではなかった。そして、さまざまな事情から、特異な体験を積んだ人達が教員となっていた。ところが、近時のように、教員となることが狭き門となると、高度な知識を持つ優秀な大学生でなければ試験にパスできない。つまり、勉強の出来る優等生の教員が多くなってくる。学校教育の目的が単に予備校や塾のように知識のみを教えるものならば、それでもよい。しかし、子供の社会性の発達とか人間関係のトレーニングということが本来第一の目的であったはずであるし、国際化とか国際社会で諸外国と交流する必要がますます高まるなかで、真剣に取り組まなければならない状況にあって、知識のみの頭でっかちの資質では、子供の教育をするにあたり問題がでてこよう。勉強の出来ない子供のその「出来ない」ということが分からない、不思議だということになり、自分の教育方針、生徒の成長発達のメカニックについて熟慮することなく、出来ない子を切り捨ててしまう。あるいは、直接体罰に訴えてしまうということもありうる。

② 学校制度自体のあり方―文部省―教育委員会―校長―教師という縦の管理体制が強化されていることからする問題として、生徒が従順に学校の指導に従うように教師自身もその管理体制の現場として対応するようになってきている。現在の校則厳格化の問題はその一つの現れであろう。この縦の管理体制の強化とあいまって、住宅事情やマイカー通勤等から教員同志の横の関係が作りにくくなっている。教育上の諸問題を仲間同志で良い意味で話し合うことが出来にくくなっている。サラリーマン意識の教員が増えつつあるということであろうか、管理体制の悪弊であろうか。

③ 受験体制の問題。有名大学進学という大義名分のもとに、偏差値ですべてを計る受験戦争は進学率のよい高校への受験と言う中学生の受験戦争に発展しており、さらには、地域によっては、有名中学への進学というように、小学生の受験競争にまで発展している。社会においてはある面で競争することで成長したり、成功発展を遂げることがあるにしても、現在の大学を頂点とする受験体制が異常であることは間違いない。偏差値中心の評価は人間としての価値あるいはいろいろの能力を知識の量と頭の回転の良さで判断するにすぎない。点数評価は生徒不在の教育に堕し易い。偏差値輪切りによる競争原理はともすると落ちこぼれを量産する。これは登校拒否や校内暴力・いじめの問題などの主要な原因となる。他方では真面目に問題意識を持ち学校の運営などについて批判的な言動をする生徒に対しては内申書の問題などが派生する。

知育と競争原理の他人を蹴落としても勝つという考えはスポーツの世界でも現れている。体力向上とか趣味のスポーツクラブの余裕のある運営は消えつつあるようだ。その根は同じであろう。

第四章 家庭の変質

核家族化の問題がとりざたされて久しいが、さらに家族構成員の分化がすすみ特に父親の存在・一人っ子・受験体制への対応などがいろいろの問題を生じてきている。

① 親の権威。一家の柱である父親が勤務者であり、通勤距離も長くなってきているのが一般の家庭である。こういうところでは子供の前で父親の働いている姿を見せることが殆どない。朝ごはんを一緒にするぐらいがせいぜいで、日曜日以外は子供と話をする時間がないし、勤務の疲れのために一日ゴロゴロしている父親も多い。こうなると、自分の父親が一体何をしているのか、子供と一緒に生産的な生活をわかちあうこともほとんどなくなる。結果は、母親が養育と賸の両方をまかされることになる。母親がほとほと困った時に「お父さん叱ってください」というように助けを求める。子供がまだ小さいうちならばそれで済んでしまうかもしれないが、小学校の高学年や中学生になってからはそうもいかない。滅多にくちをきかない同居人のような存在の人間が母親に言われてそれを鵜呑みにして叱るとすれば、子供の内心はいかばかりの気持ちであろうか想像にかたくない。子供の目は厳しいものがあって、誤魔化しは効かない。

② 親の生き方と子供の疎外。サラリーマン家庭では父親は会社型人間でなかなか親の生き様を見せることができない。一方で、母親も仕事を持ったり、趣味に生きていくとする。ここでその是非を論ずるものではないが、託児所に子供を預けてテニスに興じたりする時世である。親が個人主義とエゴイズムを取り違えては子供は疎外されるだ

けである。親が自分の生き方を自信をもって子供に伝えたいことは、本当の意味で子供に夢を抱かせることができないことになりはしないか。

③ 一世帯における子供の数の減少。わが国の最近の統計では一世帯あたりの子供は平均二人を切っている。つまり、一人っ子が増えているということである。一人っ子自体に何か問題があるということではないが、子供が少ないということは家庭のなかで親の過保護・過干渉を招きやすいといえよう。一方、兄弟がいないことからややもすると、兄弟喧嘩やいさかいを通しての心身のいたみを体験する機会が少ない。②で述べたことと考え合わせると、家庭内暴力の原因を親が造っていることになる。

④ 三世代同居の増加と難しさ。住宅事情（土地高騰など）の問題で、金銭的都合から祖父母・夫婦・孫の三世代同居をせざるをえない事態も増加している。東京都目黒の父母と祖母殺しの中学生の事件は耳目に新しい。事件の背景には三世代同居の問題（嫁・姑の関係など、老人の自殺の問題にも発展する場合もある）もあったのではないかといわれる。

⑤ 受験教育への対応。子供を有名大学・進学校へ入れたいというのは親の気持ちとしては常であろう。そのための臨戦体制をとることになると、家庭の仕事を分担させたりすることもなく、勉強していれば他は何もさせないと言うことになる、これが数カ月の短期間ならば余り影響がないかも知れないが、何年も続くとなると家庭での最小限の役割体験をせずに成長することになる。また、勉強しているならといって高価な物を買いはずえることも簡単にしてしまう。気をつけなければならないのは次のことである。つまり、汗して働くことの意味を身体を通して体験すべき時

にしない、ということの結果は生活実感のない空想的傾向たとえば漫画劇画と同じレベルでの意識をもち、テレビやラジオ等のタレントとの同一化をするというような内面の子供にしてしまうことになる。さらに、競争原理を生のまま出してしまうと、他人よりとにかく良い点数をとるように、他人を蹴落としても合格をするように、というように基本的にエゴイスティックな他人の立場に立つてものごとを考えないような育て方をするようになってしまう。注――横浜の浮浪者襲撃事件の少年達の動機は被害者がただ汚い・不用の人間だからということであった。

第五章 まとめと今後の課題

これまで三つの場面に分けて少年を取り巻く状況の変化を概観してきた。もちろん子供の素質、心身の発達過程、成熟度をあわせ考えなければならないが、言えることは、それらの場面での諸問題が全てそろった時、子供にとって息抜きの場・逃げ込む所がなくなるということである。追い詰められた結果はどういうことになるか、徐々に少しずつ問題を解決するかあるいは代償行動によって昇華することが出来ずに極限までエネルギーが蓄積され、爆発的に問題解消を図ろうとすることになる。その解消の仕方は、少年自身の消滅かあるいは問題提起者である他人の消滅ということになる。つまり、自傷・他害から最終的には自殺・他殺に到ることになるかもしれない。旧民法下の時代、戸主の権力が強大であった時にも子供の自殺が現在と比べすくなくあつたことを想起すべきである。ここでとり上げている少年の問題行動の中で、いじめ・登校拒否・校内暴力・家庭内暴力・理由なき暴力・自殺企図といったものの根は同じであろう。

① 事前に親として、現実はどういう対応が考えられようか。

- (a) 家庭生活、親子関係の日常活動の中で体験的に自分の責任は自分でとるという躰をしておくこと。
- (b) 子供の心理を余裕のある状態にしておくこと。子供の趣味・興味を持っていることなどを全て取り上げないこと。言い換えれば、逃げ込める所を許しておくことである。

(c) 親自身が余裕のある精神生活を送ること。家庭の外でどれほどの困難があったにせよ、少なくとも家では感情むきだしに子供にせってはならない。(子供自身のことでは別である)。

(d) 受験や競争原理については、子供と良くコミュニケーションをはかって、何のための勉強か、なぜ競争するのかを十分自覚させる必要がある。もちろん、親自身も納得していなければならない。

② 少年を取り巻く問題状況を解決する方法はどんなことが考えられるであろうか。

(a) 大人自身の自我の確立―親となる程成長していない大人がまだまだいるわけで、(例えば、子殺し・子捨てをするような母親になるべきでないまたはなりきれない女性)。

(b) 人間関係の見直し―社会性欠如・会社型人間から脱皮すること。

(c) 教育(受験体制を含む)制度の改善。善悪と正誤の混同を正すこと。

(d) 有害マス・コミを排除すること。

(e) 住宅環境の問題を改善すること。

これら五つのうち国が本気でするならば、(c)、(d)、(e)の三つは相当程度に短期間で出来ると考えられる。(a)と(b)は

時間をかけて努力しなければならないが、日本の精神文化の歴史を遡れば、大人の文化であった。何故、今日のように余裕のない精神状況になったのか、様々の角度から分析していくと、意外にみちがひらけるかも知れない。否、総力をあげてそうすべきである。

〔注〕 この表は比較法制研究第九号（一九八六）二三頁―二七頁の表で、当日の資料として配布した。

年 度	社会経済等の動向	少年の考行傾向と事例	特 徴
20年	第二次大戦終結、米国民権を要求。	少年刑法定45,778人(人口比4.7) 元少囚の暴徒横行(22%)	※アブレ現象
21年	GHIQ 憲法改正草案を提出、日本国憲法公布。	少年刑法定 89,388 (人口比10.7)	※アブレ現象
22年	2.1 セキスト問題発生 6・3・3・4 24校自衛堂 切腹事件公布	京大生と交際人(26%)	
23年	児童福祉法施行 特児寄託法公布 (ヤリ市児童の保護費)	自1945事件多発	
24年	少年法・少年院の施行(20%) 適用は26年(21%) (ト山、三蔵、松川事件発生)	ヒ・ロンの流行 元クラフ社長の自殺(2%)	※子どもの問題問題
25年	生活保護法公布 朝鮮戦争はじまる	学生間の金貸し放火(21%) オースメータ事件(18%)	
26年	児童福祉法制定 日本平和条約、日本安全保障 条約締結	少年考行戦後第一のピーク 断工公団騒動(25%)	
27年	ノーブール賞 道徳活動防止法公布 児童手帳法を改正(1)に改訂	少年刑法定減少、しかし阿墨犯罪 増加 女子高生の選挙権行使者から付八 分事件(17%)	
28年	NHK テレビ本放送開始、 産業大学校(後に防衛大学校 と改称)開設	18歳未満禁止のダンスホール通い が男女高校生に限局	※ヒ・ロンの流行
29年	中央青年同盟結成、青少年 法改正(刑罰加重)を決定 防衛庁、自衛隊発足	ヒ・ロンの自少年間に広がる傾向	
30年	厚生省に児童相談所設置 法改正(2)に改訂	少年考行再び増加 小学生の自殺目立つ	※人権問題
31年	法改正(3)に改訂 児童福祉法公布 好意金が授け(神武天皇) (スガノ・マコト法施行)	思春期騒動開始	※社会問題問題
32年	日ソ・日米通商条約締結	暴力団の出現 女子高生による暴行事件(19%) 少年考行マナー化傾向 野球場で反対の高校生暴行が事件	※暴力団
33年	刑法・刑事訴訟法の一部改正 児童防止法施行	カミナリ騒動 京大生暴行事件(18%)	※少年の自衛隊
34年	(マインゲーム)	けんかからの殺人目立つ 暴行事件(17%) 公安事件に発	
35年	安保運動 社会党議員が少年に利権される 高層ビル落成式で暴行 (若者による)を待たない 運動始まる) (レジャーゲーム) (人間派現象)	けんかからの殺人目立つ 暴行事件(17%) 公安事件に発	
36年		17～19歳「危険な年代」とされる 暴行事件が中学生高生に 流行	※暴行事件
37年	都市化の問題 交通公害の問題(1)に改訂	少年考行増加	
38年	(消費文化)	少年考行ひき続き増加	
39年	東京オリンピック開催 東武新幹線開通	少年考行第二のピーク(18%) 低年齢化 教授・給食を父兄にもつ少年の 12歳(17%) 暴行事件(17%)	
40年	公害基本法公布	暴行事件(17%)	
41年	ベトナム戦争の影響、大学生 ・高校生に 大学紛争の発生 (フーテン族の出現) <少年法改正に関する問題(2) (2)>	シンカー・ボンド遊びの流行	※シンカー・ボンド遊び
42年	<法改正少年法改正案(18%) (2)>	ひかり号暴行事件(18%)	
43年	大学紛争激化 過激派学生、暴徒と衝突	少年考行の広域化(犯罪化)悪化が 目立つ シンカー・ボンド遊び激増 三徳門暴行事件 新幹線暴行事件	※暴行事件

年 度	社会経済等の動向	少年の考行傾向と事例	特 徴
44年	朝鮮・小笠原返還で過激 派学生暴行と衝突 東京高検庁(1)全検開審 法改正案(2)、公害等の改正を 決定 (1)国号改め、軍事法、大改正化、	連続ヒストル相殺事件(18%) 高校生とのサバット会 殺人事件 高校一年生の同級生自決殺人事件 (16%)	※ヒストル相殺事件
45年	<少年法改正案(18%) (2)>を修正、LSD を修正に指定 野方青少年法改正公布 交通完全対策基本法公布	少年考行増加傾向 シンカー・ボンド遊びから中子へ 移る傾向 ハイジャック・シージャック等の 大規模事件目立つ	※シンカー・ボンド遊び
46年	<最高検10年事件法改正案(18%) (2)>を修正、LSD を修正に指定 野方青少年法改正公布 交通完全対策基本法公布	連続ヒストル相殺事件 (18%)の発生	
47年	<日本児童連合会、少年法 改正に関する意見書(18%) (2)>を提出、LSD を修正に指定 野方青少年法改正公布 交通完全対策基本法公布	小学生の自殺者急増 シンカー・ボンド遊び減少傾向	
48年	ベトナム戦争 オイルショック (1)に改訂、物不足(2)に改訂 (2)に改訂、子供目立つ	飛び飛びの自殺目立つ 小・中学生の自殺者最高	
49年	学校教育法改正(教師法制定) 学校給食法改正	中・高生間の事件増加 学生の内ゲバがユースレート	
50年	<少年法改正案(18%) (2)>を修正、LSD を修正に指定 野方青少年法改正公布 交通完全対策基本法公布	女子中・高生間の事件増加 殺人事件の増加	
51年	田中元首相のライオン事件発生 (ライオン事件) 中教審「ゆとりのある学校生 活」を提言 (1)に改訂、子供目立つ	児童虐待化 女子高生殺人(小5)	
52年	<少年法改正案(18%) (2)>を修正、LSD を修正に指定 野方青少年法改正公布 交通完全対策基本法公布	児童虐待化 女子高生殺人(小5)	
53年	大田区でヤリ金商売が全国初 の「ヤリ金商売」に発展 野方青少年法改正公布 交通完全対策基本法公布	15歳少年の4人殺害目立つ 小学2年生殺人(小6) 下級生暴行(小4)	
54年	共通一決試験実施 金融機関新設法制定 文芸春秋小・中学生自決防止 対策で満点 (テレビゲーム暴行のピーク) ヒメ本等フェス本が大量に 出回る ライオン相殺事件(18%)に改訂 (2)に改訂	いじめによる死傷殺人事件 (小3) いじめによる自殺(中2) 相殺事件、自殺事件(高2)	
55年	新形暴行の発生(18%)に改訂 (2)に改訂、子供目立つ	少女殺人(小1) 酒鬼の文壇相殺事件(小6) 金瓶梅文壇殺人事件(道人生)	
56年	通り魔事件で野方青少年法改正 案(18%)を修正、LSD を修正に指定 野方青少年法改正公布 交通完全対策基本法公布	児童虐待化・性考行の増加 校内暴力の発生 全額法改正52%を少年が占める	
57年	児童虐待防止法制定 少年考行総合対策委員会 (18%)に改訂	中学生による教師暴力依然増加 高校生交際殺人事件	
58年 (18%)	大田区でヤリ金商売が全国初 の「ヤリ金商売」に発展 野方青少年法改正公布 交通完全対策基本法公布	少年考行激増(人口比18.6%) 中学生による暴行事件 刀傷・銃撃事件 教師による生徒暴行事件(町田山 田先生中子)	※いじめ問題
59年	児童虐待防止法制定 少年考行総合対策委員会 (18%)に改訂	いじめに対する死傷殺人事件 (59年高1)	